校異源氏物語・藤のうらは

御いそきのほとにも宰相の中将はなかめかちにてほれ　くしき心ちするをかつはあやしくわかこゝろなからしふねきそかしあなかちにかうおもふことならはせきもりのうちもねぬへきけしきにおもひよはりたまふなるをきゝなからおなしくは人はるからぬさまにみはてんとねんするもくるしうおもひみたれ給女君もをとゝのかすめ給しことのすちをもしさもあらはなにのなこりかはとなけかしうてあやしくそむき　くにさすかなる御もろ恋なりをとゝもさこそこゝろつよかり給ひしかとたけからぬにおほしわつらひてかの宮にもさやうにおもひたちはてたまひなはまたとかくあらためおもひかゝつらはむほと人のためもくるしうわか御方さまにも人わらはれにをのつからかろ　くしきことやましらむしのふとすれとうち　くのことあやまりもよにもりにたるへしとかくまきらはしてなをまけぬへきなめりとおほしなりぬうへはつれなくてうらみとけぬ御中なれはゆくりなくいひよらむもいかゝとおほしはゝかりてこと　くしくもてなさむも人のおもはむところをこなりいかなるつゐてしてかはほのめかすへきなとおほすにやよひ廿日おほ殿の大宮の御き日にてこくらくしにまうて給へり君たちみなひきつれいきほひあらまほしくかむたちめなともあまたまいりつとひ給へるに宰相の中将をさ　くけはひをとらすよそほしくてかたちなとたゝいまのいみしきさかりにねひゆきてとりあつめゝてたき人の御ありさまなりこのおとゝをはつらしとおもひきこえ給しよりみえたてまつるもこゝろつかひせられていといたうよをひしもてしつめて物し給ふをおとゝもつねよりはめとゝめ給みす経なと六条の院よりもせさせ給へり宰相の君はましてよろつをとりもちてあはれにいとなみつかうまつり給ふゆふかけてみなかへり給ほと花はみなちりみたれかすみたと　くしきにおとゝむかしをおほしいてゝなまめかしううそ吹なかめ給ふ宰相もあはれなるゆふへのけしきにいとゝうちしめりてあまけありと人ゝのさはくになをなかめいりてゐ給へり心ときめきにみたまふことやありけん袖をひきよせてなとかいとこよなくはかむし給へるけふのみのりのえにをもたつねおほさはつみゆるし給ひてよやのこりすくなくなり行すゑの世におもひすて給へるも恨きこゆへくなんとの給へはうちかしこまりてすきにし御おもむ

けもたのみきこえさすへきさまにうけ給をくこと侍しかとゆるしなき御けしきにはゝかりつゝなんときこえ給心あはたゝしきあま風にみなちり　くにきほいかへり給ぬきみいかにおもひてれいならすけしきはみ給つらんなとよとゝもにこゝろをかけたる御あたりなれははかなきことなれとみゝとまりてとやかうやとおもひあかし給ふこゝらのとしころのおもひのしるしにやかのおとゝもなこりなくおほしよはりてはかなきつゐてのわさとはなくさすかにつきつきしからんをおほすに四月のついたちころおまへのふちのはないとおもしろう咲みたれてよのつねの色ならすたゝにみすくさむことおしきさかりなるにあそひなとし給てくれ行ほとのいとゝ色まされるにとうの中将して御せうそこあり一日の花のかけのたいめんのあかすおほえ侍しを御いとまあらはたちより給ひなんやとあり御文には

わかやとの藤の色こきたそかれにたつねやはこぬ春のなこりをけにいと面白き枝につけ給へり待つけ給へるもこゝろときめきせられてかしこまりきこえ給ふ

中　くに折やまとはむふちのはなたそかれときのたと　くしくはときこえてくちをしくこそおくしにけれとりなをし給へよときこえたまふ御ともにこそとの給へはわつらはしきすいしんはいなとて返しつおとゝの御まへにかくなんとて御覧せさせ給ふおもふやうありてものし給つるにやあらむさもすゝみものし給はゝこそはすきにしかたのけうなかりしうらみもとけめとの給御心をこりこよなうねたけなりさしも侍らしたいのまへの藤つねよりもおもしろうさきて侍なるをしつかなるころほひなれはあそひせんなとにや侍らんと申給わさとつかひさゝれたりけるをはやうものしたまへとゆるしたまふいかならむとしたにはくるしうたゝならすなをしこそあまりこくてかろひためれひさむきのほとなにとなきわか人こそふたあひはよけれひきつくろはんやとてわか御れうの心ことなるにえならぬ御そともくして御ともにもたせてたてまつれ給わか御方にてこゝろつかひいみしうけさうしてたそかれもすき心やましきほとにまうて給へりあるしの君たち中将をはしめて七八人うちつれてむかへいれたてまつるいつれとなくおかしきかたちともなれとなを人にすくれてあさやかにきよらなる物からなつかしうよしつきはつかしけなりおとゝおましひきつくろはせなとし給ふ御よういをろかならす御かうふりなとし給ていてたまふとてきたのかたわかき女房なとにのそきてみ給へいとかうさくにねひまさる人なりようひなといとしつかにもの　くしやあさやかにぬけいておよすけたるかたはちゝおとゝにも

まさりさまにこそあめれかれはたゝいとせちになまめかしうあひきやうつきてみるにゑましく世の中わするゝ心ちそしたまふおほやけさまはすこしたはれてあされたるかたなりしことはりそかしこれはさえのきはもまさり心もちゐをゝしくすくよかにたらいたりとよにおほえためりなとの給ひてそたいめし給ものまめやかにむへ　くしき御ものかたりはすこしはかりにて花のけふにうつり給ぬ春の花いつれとなくみなひらけいつる色ことにめをおとろかぬはなきを心みしかくうちすてゝちりぬるかうらめしうおほゆるころほひこの花のひとりたちをくれて夏に咲かゝるほとなんあやしう心にくゝあはれにおほえ侍るいろもはたなつかしきゆかりにしつへしとてうちほゝゑみ給へるけしきありてにほひきよけなり月はさしいてぬれと花の色さたかにもみえぬ程なるをもてあそふに心をよせておほみきまいり御あそひなとし給うおとゝほとなくそらゑひをし給てみたりかはしくしひゑはし給をさる心していたうすまひなやめり君はするゑのよにはあまるまてあめのしたのいふそくにものし給ふめるをよはいふりぬる人おもひすて給ふなんつらかりける文籍にも家礼といふことあるへくやなにかしのをしへもよくおほししるらむとおもひ給ふるをいたうこゝろなやまし給ふとうらみきこゆへくなんなとの給ひてゑいなきにやおかしきほとにけしきはみ給いかてかむかしをおもふたまへいつる御かはりともにはみをすつるさまにもとこそ思給へしり侍をいかに御覧しなすことにか侍らん本よりおろかなる心のおこたりにこそとかしこまりきこえ給ふ御ときよくさうときてふちのうらはのとうちすし給へる御けしきを給はりて頭中将はなの色こくことにふさなかきを折てまらうとの御さかつきにくはふとりてもてなやむにおとゝ

　紫にかことはかけむふちのはなまつよりすきてうれたけれとも宰相杯をもちなからけしきはかりはいしたてまつり給へるさまいとよしあり

　幾かへり露けき春をすくしきてはなのひもとくをりにあふらんとうの中将にたまへは

　たをやめの袖にまかへる藤の花みる人からや色もまさらむつき　くすんなかるめれとゑひのまきれにはか　くしからてこれよりまさらす七日の夕つく夜かけほのかなるにいけのかゝみのとかにすみわたれりけにまたほのかなる木すゑとものさう　くしき比なるにいたうけしきはみよこたはれる松のこたかきほとにはあらぬにかゝれる花のさまよのつねならすおもしろし例の弁少将こゑいとなつかしくてあしかきをうたふおとゝいとけやけうもつかふまつるかなとうちみたれ給てとしへにけるこのいゑのとうちくはへ給へる御こゑいとおもしろ

しおかしきほとにみたりかはしき御あそひにて物おもひのこらすなりぬめりやう　く夜更行ほとにいたうそらなやみしてみたり心ちいとたへかたうてまかてん空もほと　くしうこそ侍ぬへけれとのいところゆつり給てんやと中将にうれへ給おとゝ朝臣や御やすみ所もとめよおきないたうゑひすゝみてむらいなれはまかりいりぬといひすてゝいり給ぬ中将はなのかけの旅ねよいかにそやくるしきしるへにそ侍やといへは松にちきれるはあたなる花かはゆゝしやとせめ給中将は心のうちにねたのわさやとおもふところあれと人さまのおもふさまにめてたきにかうもありはてなむと心よせわたることなれはうしろやすくみちひきつおとこ君は夢かとおほえ給ふにもわかみいとゝいつかしうそおほえ給けんかし女はいとはつかしとおもひしみてものし給もねひまされる御ありさまいとゝあかぬところなくめやすし世のためしにもなりぬへかりつるみを心もてこそかうまてもおほしゆるさるめれあはれを知給はぬもさまことなるわさかなとうらみきこえ給少将のすゝみいたしつるあしかきのおもむきはみゝとゝめたまひつやいたきぬし哉なかはくちのとこそさしいらへまほしかりつれとの給へは女いときゝくるしとおほして

あさきなをいひなかしける川くちはいかゝもらしゝ関のあらかきあさましとの給さまいとこめきたりすこしうちはらひて

もりにけるくきたのせきを川くちのあさきにのみはおほせさらなんとし月のつもりもいとわりなくてなやましきにものおほえすとゑひにかこちてくるしけにもてなしてあくるもしらすかほなり人　くきこえわつらふをおとゝしたりかほなるあさゐかなとゝかめ給ふされとあかしはてゝそいて給ふねくたれの御あさかほみるかひありかし御文はなをしのひたりつるさまの心つかひにてあるをなか　く今日はえきこえ給はぬをものいひさかなきこたちつきしろうにおとゝわたりてみ給ふそいとはりなきやつきせさりつる御けしきにいとゝおもひしらるゝ身のほとをたへぬ心に又きえぬへきも

とかむなよしのひにしほるてもたゆみけふあらはるゝ袖のしつくをなといとなれかほなりうちゑみて手をいみしうもかきなられにけるかなゝとの給もむかしのなこりなし御返いといてきかたけなれはみくるしやとてさもおほしはゝかりぬへきことなれはわたり給ぬ御つかひのろくなへてならぬさまにて給へり中将をかしきさまにもてなし給ふつねにひきかくしつゝかくろへありきし御つかひけふはをもゝちなと人ゝしくふるまふめり右近のそうなる人のむつましうおほしつかひ給なりけり六条のおとゝもかくときこしめしてけり宰相つねより

もひかりそひてまいり給へれはうちまもり給てけさはいかに文なとものしつやさかしき人も女のすちにはみたるゝためしあるを人わろくかゝつらひ心いられせてすくされたるなんすこし人にぬけたりける御心とおほえけるおとゝのみをきてのあまりすくみてなこりなくくつをれ給ぬるをよ人もいひ出る事あらんやさりとても我かたゝけうおもひかほに心をこりしてすき　くしき心はへなともらし給ふなさこそおいらかにおほきなる心をきてとみゆれとしたの心はへおゝしからすくせありて人みえにくきところつき給へる人なりなと例の教へきこえ給ことうちあひめやすき御あはひとおほさる御こともみえすすこしかこのかみはかりとみえ給ふほか　くにてはおなしかほをうつしとりたるとみゆるを御まへにてはさま　くあなめてたとみえ給へりおとゝはうすき御なをししろき御そのからめきたるかもんけさやかにつや　くとすきたるをたてまつりてなをつきせすあてになまめかしうおはします宰相殿はすこし色ふかき御なをしに丁子そめのこかるゝまてしめるしろきあやのなつかしきをき給へることさらめきてえんにみゆ潅仏ゐてたてまつりて御導師をそくまいりけれは日暮て御かた　くよりはらはへいたしふせなとおほやけさまにかはらす心　くにし給へりおまへのさほうをうつして君たちなともまいりつとひてなか　くうるはしきこせんよりもあやしう心つかひせられておくしかちなり宰相はしつこゝろなくいよ　くけさうしひきつくろひていて給ふをわさとならねとなさけたち給わか人はうらめしとおもふもありけりとしころのつもりとりそへておもふやうなる御なからひなめれはみつもゝらむやはあるしのおとゝいとゝしきちかまさりをうつくしき物におほしていみしうもてかしつきゝこえ給ふまけぬるかたのくちおしさはなをおほせとつみものこるましうそまめやかなる御心さまなとのとしころこと心なくてすくしたまへるなとをありかたくおほしゆるす女御の御有様なとよりもはなやかにめてたくあらまほしけれはきたのかたさふらふ人　くなとは心よからすおもひいふもあれとなにのくるしき事かはあらむあせちの北の方なともかゝるかたにてうれしとおもひきこえ給けりかくて六条院の御いそきは廿よ日のほとなりけりたいの上みあれにまうて給とてれいの御かた　くいさなひきこえ給へとなか　くさしもひきつゝきて心やましきをおほしてたれも　くとまり給てこと　くしきほとにもあらす御くるま廿斗して御前なともくた　くしき人数おほくもあらすことそきたるしもけはひことなりまつりの日のあか月にまうてたまひてかへさには物御覧すへき御さしきにおはします御方かたの女房おの
　くくるまひきつゝきて御まへところしめたるほといかめしうかれはそれとゝ

をめよりおとろおとろ　くしき御いきほひなりおとゝは中宮の御はゝ宮す所の車をしさけられたまへりしをりのことおほしいてゝ時により心おこりしてさやうなることなんなさけなき事なりけるこよなくおもひけちたりし人もなけきおふやうにてなくなりにきとそのほとはの給ひけちてのこりとまれる人の中将はかくたゝ人にてわつかになりのほるめり宮はならひなきすちにておはするも思へはいとこそあはれなれすへていとさためなき世なれはこそなに事もおもふさまにていけるかきりのよをすくさまほしけれとのこり給はむするの世なとのたとしへなきおとろへなとをさへ思はゝからるれはとうちかたらひ給てかむたちめなとも御さしきにまいりつとひ給へれはそなたにいて給ぬ近衛つかさのつかひはとうの中将なりけりかのおほとのにていてたつ所よりそ人　くはまいりたまふけるとうないしのすけもつかひなりけりおほえことにてうちとうくうよりはしめ奉りて六条院なとよりも御とふらひともところせきまて御心よせいとめてたし宰相の中将いてたちのところにさへとふらひ給へりうちとけすあはれをかはし給御中なれはかくやむことなきかたにさたまり給ぬるをたゝならすうちおもひけり

　なにとかやけふのかさしよかつみつゝおほめくまてもなりにけるかなあさましとあるをおりすくし給はぬはかりをいかゝ思ひけんいと物さはかしくるまにのるほとなれと

　かさしてもかつたとらるゝくさのなはかつらをおりし人やしるらんはかせならてはときこえたりはかなけれとねたきいらへとおほすなをこのないしにそおもひはなれすはひまきれ給へきかくて御まいりはきたのかたそひ給ふへきをつねになか　くしうえそひさふらひ給はしかゝるつゐてにかの御うしろみをやそへましとおほすうへもつゐにあるへきことのかくへたゝりてすくし給ふをかの人もゝのしとおもひなけかるらむこの御心にもいまはやう　くおほつかなくあはれにおほししるらんかた　く心をかれたてまつらんもあいなしとおもひなり給て此をりにそへたてまつり給へまたいとあえかなるほともうしろめたきにさふらふ人とてもわか　くしきのみこそおほかれ御めのとたちなともみをよふことの心いたるかきりあるをみつからはえつとしもさふらはさらむほとうしろやすかるへくときこえ給へはいとよくおほしよる哉とおほしてさなんとあなたにもかたらひの給けれはいみしくうれしくおもふことかなひ侍る心ちして人のさうそくなにかのこともやむことなき御ありさまにおとるましくいそきたつあまきみなんなをこの御をいさきみたてまつらんの心ふかゝりけるいま一度み奉

るよもやといのちをさへしふねくなしてねんしけるをいかにしてかはとおもふもかなし其よはうへそひてまいり給ふにさて車にもたちくたりうちあゆみなと人わるかるへきをわかためはおもひはゝからすたゝかくみかきたてまつり給ふたまのきすにてわかかくなからうるをかつはいみしう心くるしう思まいりのきしき人のめおとろく斗のことはせしとおほしつゝめとをのつからよのつねのさまにそあらぬやかきりもなくかしつきすへたてまつり給てうへはまことにあはれにうつくしとおもひきこえ給ふにつけても人にゆつるましうまことにかゝる事もあらましかはとおほすおとゝも宰相の君もたゝこの事ひとつをなんあかぬ事かなとおほしける三日すこしてそうへはまかてさせ給たちかはりてまいり給よ御たいめんありかくおとなひ給けちめになんとし月の程もしられ侍れはうと　くしきへたてはのこるましくやとなつかしうの給て物語なとし給これもうちとけぬるはしめなめり物なとうちいひたるけはひなとむへこそはとめさましうみ給またいとけたかうさかりなる御けしきをかたみにめてたしとみてそこらの御なかにもすくれたる御心さしにてならひなきさまにさたまり給けるもいとことはりとおもひしらるゝにかうまてたちならひきこゆるちきりをろかなりやはとおもふ物からいて給ふきしきのいとことによそほしく御手車なとゆるされ給て女御の御有様にことならぬをおもひくらふるにさすかなるみのほとなりいとうつくしけにひゝなのやうなる御有様を夢の心ちしてみたてまつるにも涙のみとゝまらぬはひとつものとそみえさりけるとしころよろつになけきしつみさま　くうきみとおもひくしつるいのちものへまほしうはれ　くしきにつけて誠に住吉の神もをろかならすおもひしらるおもふさまにかしつききこえてこゝろをよはぬことはたおさ　くなき人のらう　くしさなれはおほかたのよせおほえよりはしめなへてならぬ御有様かたちなるに宮もわかき御心ちにいと心ことにおもひきこえ給へりいとみたまへる御かた　くの人なとはこのはゝ君のかくてさふらひ給をきすにいひなしなとすれとそれにけたるへくもあらすいまめかしうならひなきことをはさらにもいはす心にくゝよしある御けはひをはかなきことにつけてもあらまほしうもてなしきこえ給へれは殿上人なともめつらしきいとみところにてとり　くにさふらふ人ゝも心をかけたる女房のよういう有様さへいみしくとゝのへなし給へり上もさるへきをりふしにはまいり給御なからひあらまほしううちとけ行にさりとてさしすきものなれすあなつらはしかるへきもてなしはたつゆなくあやしくあらまほしき人のありさま心はへ也おとゝもなかゝらすのみおほさるゝ御よのこなたにとおほしつる御まいりのかひあるさまにみ

たてまつりなし給て心からなれと世にうきたるやうにてみくるしかりつる宰相の君も思なくめやすきさまにしつまり給ぬれは御心おちゐはて給て今はほいもとけなんとおほしなるたいのうへの御有様のみすてかたきにも中宮おはしませはをろかならぬ御心よせ也此御方にも世にしられたるおやさまにはまつおもひきこえ給ふへけれはさりともとおほしゆつりけり夏の御方の時にはなやき給ましきも宰相の物し給へはとみなとり　くにうしろめたからすおほしなり行あけむとしよそちになり給御賀のことをおほやけよりはしめ奉りておほきなるよのいそき也その秋太上天皇になすらふ御くらゐえ給ふてみふくはゝりつかさかうふりなとみなそひ給かゝらてもよの御心にかなはぬことなけれとなをめつらしかりけるむかしのれいをあらためて院しともなとなりさまことにいつくしうなりそひ給へはうちにまいり給へき事かたかるへきをそかつはおほしけるかくてもなをあかすみかとはおほして世の中をはゝかりてくらゐをえゆつりきこえぬことをなむ朝夕の御嘆きくさなりける内大臣あかり給て宰相の中将中納言になり給ぬ御よろこひにいて給ひかりいとゝまさり給へるさまかたちよりはしめてあかぬことなきをあるしのおとゝもなか　く人におされまし宮つかへよりはとおほしなをる女君の大輔のめのと六位すくせとつふやきしよひのこと物のをり　くにおほしいてけれはきくのいとおもしろくてうつろひたるを給はせて

あさみとりわかはの菊を露にてもこきむらさきの色とかけきやからかりしをりのひとことはこそわすられねといとにほひやかにほゝゑみて給へりはつかしういとをしき物からうつくしうみたてまつる

ふた葉よりなたゝるそのゝ菊なれはあさき色わく露もなかりきいかに心をかせ給へりけるにかといとなれてくるしかる御いきおひまさりてかゝる御すまひもところせけれは三条殿にわたり給ぬすこしあれにたるをいとめてたくすりしなして宮のおはしましゝかたをあらためしつらひてすみ給ふむかしおほえてあはれにおもふさまなる御すまひなりせんさいともなとちいさき木ともなりしもいとしけきかけとなり一村薄も心にまかせてみたれたりけるつくろはせ給やり水のみくさもかきあらためていと心行たるけしきなりおかしきゆふ暮のほとをふたところなかめ給てあさましかりしよの御おさなさの物語なとし給に恋しきこともおほく人のおもひけむこともはつかしう女きみはおほしいつふる人とものまかてちらすさうし　くにさふらひけるなとまうのほりあつまりていとうれしとおもひあへりおとこ君

なれこそは岩もるあるしみし人のゆくゑはしるやゝとのまし水女きみ

なき人のかけたにみえすつれなくてこゝろをやれるいさらゐの水なとの給
ほとにおとゝ内よりまかて給けるをもみちの色におとろかされてわたり給へり
むかしおはさゐし御有様にもおさ　くかはる事なくあたり　くおとなしくすま
ひ給へるさまはなやかなるをみたまふにつけてもいと物あはれにおほさる中納
言もけしきことにかほすこしあかみていとゝしつまりて物し給あらまほしくう
つくしけなる御あはひなれと女はまたかゝるかたちのたくひもなとかなからん
とみえ給へりおとこはきはもなくきよらにをはすふる人ともおまへにところえ
てかみさひたることゝもきこえいつありつる御手習とものちりたるを御らんし
つけてうちしほたれ給このみつの心たつねまほしけれとおきなはことといみしく
との給ふ

そのかみのおい木はむへもくちぬらむうへしこ松もこけおひにけりおとこ
君の御さいしやうのめのとつらかりし御心もわすれねはしたりかほに

いつれをもかけとそたのむふたはよりねさしかはせる松のするゑ　くおい人
ともゝかやうのすちにきこえあつめたるを中納言はおかしとおほす女君はあい
なくおもてあかみくるしときゝ給ふ神無月の廿日あまりのほとに六条院に行幸
あり紅葉のさかりにてけふあるへきたひの行幸なるに朱雀院にも御せうそこあ
りて院さへわたりおはしますへけれは世にめつらしく有難きことにてよ人も心
をおとろかすあるしの院方も御心をつくしめもあやなる御心まうけをせさせ給
ふみの時に行幸ありてまつむまは殿に左右のつかさの御馬ひきならへて左右近
衛たちそひたるさほう五月のせちにあやめわかれすかよひたりひつしくたるほ
とにみなみのしん殿にうつりおはします道のほとのそり橋わた殿にはにしきを
しきあらはなるへき所にはせんしやうをひきいつくしうしなさせ給へりひんか
しのいけに船ともうけてみつしところのうかひのおさ院のうかひをめしならへ
てうをおろさせ給へりちいさきふなともくいたりわさとの御らんとはなけれと
もすきさせ給ふみちのけふはかりになん山のもみちいつかたもおとらねと西の
おまへは心ことなるをなかのらうのかへをくつし中門をひらきて霧のへたてな
くて御覧せさせ給ふ御さふたつよそひてあるしの御さはくたれるをせむしあり
てなをさせ給ふほとめてたくみえたれとみかとはなをかきりあるいや　くしさ
をつくしてみせたてまつり給はぬことをなんおほしける池のいをゝ左少将取蔵
人所のたかゝいのきたのにかりつかまつれる鳥ひとつかひを右のすけさゝけて
しん殿のひんかしより御まへにいてゝみはしの左右にひさをつきてそうすおほ
きおとゝ仰こと給てゝうしておものにまいるみこたちかむたちめなとの御まう

けもめつらしきさまにつねのことゝもをかへてつかうまつらせ給へりみな御ゑいになりて暮かゝるほとにかく所の人めすわさとの大かくにはあらすなまめかしきほとに殿上のわらはへまひつかうまつる朱雀院の紅葉の賀れいのふる事おほしいてらる賀皇恩といふものをそうするほとにおほきおとゝの御おとこのとをはかりなるせちにおもしろうまふうちのみかと御そぬきて給ふおほきおとゝおりてふたうし給あるしの院きくをおらせ給てせいかいはのをりをおほしいつ

色まさるまかきの菊もをり　くに袖うちかけし秋をこふらしおとゝそのおりはおなしまひにたちならひきこえ給ひしをわれも人にはすくれたまへるみなからなをこのきはゝこよなかりけるほとおほししらるしくれおりしりかほなり

むらさきの雲にまかへるきくのはなにこりなきよのほしかとそみるときこそありけれと聞え給ふゆふ風のふきしくもみちの色ゝこきうすきにしきをしきたるわた殿のうへみえまかふにはのおもにかたちをかしきわらはへのやむことなきいへのこともなとにてあをきあかきしらつるはみすはうゑひそめなとつねのことれいのみつらにひたい斗のけしきをみせてみしかき物ともをほのかにまひつゝもみちのかけにかへりいるほと日のくるゝもいとおしけなりかくしよそなとおとろ　くしくはせすうへの御あそひはしまりてふんのつかさの御ことゝもめす物のけうせちなるほとにこせんにみな御ことゝもまいれり宇多の法師のかはらぬ声も朱雀院はいとめつらしくあはれにきこしめす

秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝるもみちのをりをこそみねうらめしけにそおほしたるやみかと

よのつねのもみちとやみるいにしへのためしにひけるにはのにしきをときこえしらせ給ふ御かたちいよ　くねひとゝのほり給てたゝひとつ物とみえさせ給を中納言さふらひ給かこと　くならぬこそめさましかめれあてにめてたきけはひやおもひなしにをとりまさらんあさやかににほはしき所はそひてさへみゆふへつかうまつり給いとおもしろしさうかの殿上人みはしにさふらふなかに弁の少将のこゑすくれたりなをさるへきにこそとみえたる御なからひなめり